

異文化理解の入り口としての外国語教育 ー外国人の理解から他者／自己の理解へー

木 戸 紗 織

はじめに

建学の理念の一つとして「国際的視野」や「世界で活躍できる人材の育成」を掲げている大学は少なくない。これに沿って多くの外国語科目¹が学習目標の一つに「異文化理解」を掲げている。ところが、異文化理解には具体的にどのような学習効果が期待できるのか、異文化理解をどのように授業に導入するのかは、多くの場合曖昧なままである。また、これらの外国語科目と、建学の精神および各学部の3つのポリシーとの連携についても、十分に検討されているとはいいがたい。そこで本稿では、医療系学部を対象として、外国語教育における異文化理解について考察する。その際、次の点についても考慮したい。

かつて異文化理解とは国外で暮らすために必要なものだと捉えられてきた。ところが近年では、国内の労働力不足を補うために外国人が積極的に採用され、国内の多国籍化が進んでいる。人口の減少に伴ってこの傾向は今後ますます加速すると予想されている。国際化とは、今まさに我々の足元で起きている現象なのである。こういった社会情勢を踏まえると、異文化理解を地域社会での生活に必要なものとして考え直さなければならない。以上の問題意識から、本稿では医療を学ぶ学生が、同時に国際化が進む地域社会で暮らす市民であることを念頭において、外国語教育における

¹ とくに断りがない限り、外国語科目および外国語教育とは英語を除く第二外国語教育を指す。

異文化理解について考察する。

本稿の内容は以下のとおりである。まず異文化理解に関する議論を整理し、次いで異文化理解を含む外国語教育の実態とその問題点を検討する。これに基づいて医療系学生の学びにおける異文化理解の意義について考察し、最後にこれらの原理を実際の授業にどのように取り入れるか考える。²

1. 異文化理解と外国語教育における取り組み

異文化理解の重要性は広く認識され、小学校の学習指導要領にも盛り込まれている³。しかしながらその意味するところは非常に曖昧であり、たとえば外国の社会や人々に関する知識を獲得すること、外国で適切にふるまうための学習、外国人を受け入れる寛容さなど様々に解釈されている。そのため、教育において異文化理解を取り上げること自体に懐疑的な見方もある。そこで本章では、まず異文化理解に関する議論を整理した上で、外国語教育に異文化理解がどのように組み込まれているのか見ていくことにしよう。

1.1. 異文化理解を構成する3つの要素

異文化理解についてはすでに数多くの研究がなされているが、いまだに統一的な定義は得られていない。なぜなら、本来多面的であるはずの異文

² 異文化理解については、異文化間理解、異文化理解能力など複数の表現があり、学習によって獲得できる能力なのか、そもそも文化をどう定義するのかといった議論すべき点が多々残されている。これらの点に関する詳細な検討は別稿に譲るとして、本稿では最も広く使用されている異文化理解という語を用いることとする。

³ 平成29年（2017年）公示の学習指導要領では、小学校3－4年生の英語の学習内容の一つとして「異なる文化をもつ人々との交流などを体験し、文化等に対する理解を深めること」が求められている。

化理解が、それぞれの側面でのみ論じられてきたからである。しかしながら、竹内（2012）は複数の主要な先行研究を比較した上で、異文化理解の定義に関しては曖昧さが残るものの、異文化理解を構成する要素については一定のコンセンサスが得られつつあると指摘している。以下に、その異文化理解を構成する3つの要素を見ていこう。

〈態度〉

異文化に対して先入観のないオープンな姿勢で臨むこと、判断を留保し理解しようと努めること、他者の視点から物事を理解しようと努めること、他者への関心を持ち新しい学びに積極的に取り組むことなどを指す。この〈態度〉は、異文化理解の基礎でありもっとも重要な要素とされる。

〈知識〉

異文化に関する知識を有していること。この場合の知識とは、一般的に異文化として想起される文化財や伝統芸能、あるいはその社会特有の慣習といった目に見える情報だけでなく、他者との的確なインタラクションに関する知識も含む。また、異文化に接することで自文化に対して客観的な認識を得ることも含まれる。

〈技能〉

異文化を解釈し説明できること、相手についてより深く知るための能力を身につけていることを指す。上記の〈態度〉〈知識〉を獲得するために欠かせない要素である。

以上の考え方は、異文化理解を3つの構成要素に分けることで簡潔に説明している一方、これらの要素が互いに影響しあうと考えることで、多面

的な異文化理解のあり方も提示しており、非常にわかりやすい。この考え方に従えば、異文化理解とは対象地域に関する〈知識〉を得ることにとどまらず、優劣や同意・不同意の判断を保留し、対象についてより深く知るために能動的に働きかけるという〈態度〉と〈技能〉まで含むことになる。そして、これら3つの構成要素を互いに連関させることで、異文化理解は徐々に深化していくと考えられる。⁴

さらに、〈知識〉のなかに異文化だけでなく自文化が含まれていることにも注目すべきである。なぜなら、自己に関する認識は自分の所属集団を離れて初めて体得できることが多く（竹内2012：109）、異文化と向き合うことでおのずと自文化に対する理解も深まると考えられるからである。したがって、異文化理解の射程には学習者自身も含まれるとするのは妥当であろう。このことは、〈知識〉の対象がいわゆる文化（culture）だけではなく、適切なインタラクションに関する知識のような人間関係の構築に必要な諸要素を広く含んでいることと関連している。要するに、異文化理解とは自らを含む「人」が対象であり、一般的な意味での文化に限定されないことを常に意識しなければならない。

ところで、異文化理解を構成する上記の3つの要素は、外国人と接する場合のみ有効なのだろうか。先入観を持たず相手の視点から物事を理解しようと努めること、相手に関する情報やより良いインタラクションに関する知識を持っていること、相手の考えや行動を解釈し説明できること——これらは外国人に限らず世代、性別、立場など様々な面で自分とは異なる相手と接する際、常に有効であろう。異文化理解が外国人のみならず様々な他者に応用可能であることも指摘しておきたい。

⁴ このように考えると、章の冒頭で取り上げたいいくつかの解釈はいずれも断片的で、構成要素の一部に言及しているに過ぎない。

1.2. 異文化理解を含む外国語学習の実態とその問題点

では次に、外国語学習における異文化理解について見ていこう。日本の大学の外国語学習では異文化理解のためにどのような学習が行われているのだろうか。草本（2019）は、日本の大学の外国語学習プログラムの中から学習目標に異文化理解を掲げている例を抽出し、それぞれの異文化理解の解釈とそれに基づく授業方法を調べ分類した。ここで挙げられている5つの類型を簡潔にまとめると以下ようになる。⁵

- 1) 英語以外の外国語を学ぶことで多文化社会を理解する
 - ・多言語、多文化の視点を養うという考え方
 - ・授業内容：読む・聞く・話す・書くといった運用能力の習得が多い
- 2) 異文化接触をする・異文化体験をする
 - ・実際に異文化と接することが異文化の理解につながるという考え方
 - ・授業内容：海外研修のような体験、インターネットを活用したバーチャル研修など
- 3) 教養として文化に関する情報や価値観を知る
 - ・文化情報に触れることで異文化理解を促すという考え方
 - ・授業内容：文法の学習以外に、歌や文学作品、映像資料といったコンテンツを活用し文化理解を促す
- 4) 言語とコミュニケーションを学ぶ
 - ・対象となる社会を深く理解しコミュニケーションを図るために言語を

⁵ 日本の大学で実施されている外国語学習のためのプログラムから「外国語教育の目的」、「コースの目的」あるいは個々の「授業の目的」として、なんらかの形で「異文化理解」について言及されているものを抽出し分析している。最終的な分析対象は1987年～2017年に発表された38の事例で、日本語をのぞく、英語やドイツ語など9つの言語が含まれている。

習得するという考え方

- ・授業内容：おおむねコミュニケーションを重視
- 5) 異なる価値観を通して人間的な成長を促す
- ・異文化理解によって学習者のステレオタイプに気づかせ、多様性を尊重する態度を身につけさせるという考え方
 - ・授業内容：多義的な見方ができる視覚教材、協同学習

今日、異文化理解は外国語教育の目的の一つとして広く認知されているが（草本2019：79）、実際にはその解釈および授業方法にかなり幅がある。十分な言語学習の結果として異文化理解に至るという考え方から、言語学習の教材として文化を取り入れる、異文化との交流のためにコミュニケーションを重視するなど、外国語学習に重心を置きつつもどの程度の時間を異文化理解に割くか、異文化理解と関連してどのような外国語の能力を伸ばすかは、教員によって様々である。さらに、体験の場を設けることで経験から学ばせようとする方法や、外国文化への先入観を教材として異文化理解に取り組む方法など、どちらかという異文化理解に重心を置いた方法も行われている。さらに、学習目標に異文化理解と明記されていない場合も、授業中に文化情報を扱ったり文章読解の過程で文化理解を意識していたりするケースがある他（同上）、コラムや付録といった形で文化情報を扱う外国語の教科書も増えており、多くの教員が何らかの形で外国語教育に異文化理解を取り入れようとしていることがうかがえる。

しかし、1.1. で見た異文化理解の構成要素に基づいて考えると、いずれの類型も構成要素のどれかを部分的に取り入れているに過ぎず、すべてに配慮しているものはない。やはり、言語の習得と異文化理解を並行して行うには時間的・空間的な制約があり、ごく限られた範囲で取り入れざるを得ないのであろう。また、英語のようにその言語にある程度習熟してい

れば授業の選択肢も広がるが、初学者が取り組める活動は必ずしも多くない。その結果、いくつかの知識を提示し関心をもってそれらの例を受け入れるよう促すことで、その後の波及効果に期待していると考えられる。つまり、異文化理解という観点からは、外国語教育としてできることは非常に限定的であると言わざるを得ない。

そもそも、外国語教育の枠内で異文化理解を行うことの最大の問題は、異文化理解と言いつつ特定の言語圏に関する学習を行っているにすぎないのではないかという点である。しかし、この批判に対しては次のように言うことができるだろう。すなわち、外国語教育で取り上げるのはただ一つの国や言語圏だけけれども、そこで異文化理解の準備をすることにより、次に他の国々についても対応できるようになると期待できる⁶。そして、最終的には外国人に限らず様々な場面で自分とは異なる他者の理解に生かすことができるのである。したがって、外国語教育は異文化理解という大きな学びの入り口を提供する場であると考え、外国人の理解から最終的には他者理解へと広がることを見据えて授業方法を考える必要がある。そのためには、教員の希望だけでなく、学生の学習過程に沿った異文化理解の授業方法を考えなければならない。学部のポリシーやカリキュラムに沿った異文化理解を行うことで、外国語教育が終わった後も学生の学びを支援することができるのである。

2. 医療系学生の学びと異文化理解

2.1. 医療系学生に適した異文化理解の目標と授業方法

では、上述の5つの類型をもとに、医療系学生の学びという観点から異文化理解の授業方法を考えてみよう。医療系学部の学生は4年ないし6年

⁶ この点については、森田（1994：18）でも論じられている。

の修業年限のうち、概ね最初の1年間のみ外国語を学習する。卒業後は大半の学生が国家資格を得て国内の医療機関に勤務する。

この点からすると、4技能の習得を前提とした「(1) 英語以外の外国語を学ぶことで多文化社会を理解する」や、対象地域との交流を重視する「(4) 言語とコミュニケーションを学ぶ」は、医療系の学生には適していない。「(2) 異文化接触をする・異文化体験をする」に挙げられている海外研修などは留学制度の有無やカリキュラム上の制約があるが、インターネットを活用したバーチャル研修であれば近年普及しつつあるZoom等を活用して授業の一部として取り入れることは可能であろう。コロナ禍で海外渡航が制限されている中、海外の提携校と画面を通じて学生同士が交歓する機会をもつ大学は増えた。このような経験は学生にとって良い学びの機会になるだろうが、一時的な経験に終わってしまい、継続的な学びにはつながりにくいという課題もある。

これらの問題点を踏まえると、「(3) 教養として文化に関する情報や価値観を知る」は、時間的・空間的制約を考慮した現実的な授業方法であると言える。現地の学生の生活をもとにした会話練習、日本でもなじみのある童話や世界遺産に関するテキスト、時事ネタや教員の体験談に基づく文化紹介などは、おそらく日本の大学で最も一般的に行われている方法であろう。このような授業は学習者に好意的に受け止められる(草本2019: 77)だけでなく、学習者の関心を引き集中力の維持につながるという点で教員にとっても利点がある。その反面、学生にとっては受け身の一方的な授業になりうる危険があり(同上)、授業で取り上げた一例がすべての国民や地域に適應されステレオタイプ化してしまうことも危惧される。教員にとっては取り入れやすく学生にとっても楽しい方法ではあるが、(2)の交流体験と同じく継続的な学びにはつながらない。

以上とは対照的に、「(5) 異なる価値観を通して人間的な成長を促す」

は、1.1. で見た異文化理解の構成要素と重なる部分が多い。「学習者が持っている思い込みに気づかせ、それを解きほぐす作業」(前掲書：78)を通じて、自他に対する「こうあるべき」「こうに違いない」というステレオタイプを自覚させる。加えて、協同学習を取り入れることで、様々な考え方や受け止め方を提示しようとする。それだけではなく、協同学習の利点は、異文化理解のみならず自分が所属する文化や集団、そして自分自身に関する理解を促す点にある。大学で机を並べる学生たちは、年齢や学力だけでなく家庭の経済状況や親の学歴など比較的同質性の高い集団だと考えられる。しかし、当然ながらルーツやジェンダー、心身の状態や過去の学習歴などは、みな異なっている。「私たち」と一括りにしがちだが実際には個々に異なり多様である。協同学習を通してこのような違いに気づき、差異を乗り越え人間関係を構築することにより、ステレオタイプ的な見方を離れて多様性を肯定的に捉える態度を育むことができる (cf. 岩田2011：5f)。

このように、「異なる価値観を通して人間的な成長を促す」ことを目的とした異文化理解は、専門課程のカリキュラムに無理なく位置づけることができ、医療系学生の学びを支援することができる。また、その過程でグループワークなどの協同学習を取り入れることにより、学生間でも多様な意見や考え方があると気づかせることができるのである。

2.2. 医療系学生の学びにおける異文化理解の意義

では、このような「異なる価値観を通して人間的な成長を促す」ことを目的とした異文化理解によって、医療系学部の学生はどのような学びを得るのだろうか。学生の立場からより具体的に検討してみよう。

第1章で確認した通り、外国語教育で取り上げるのは一つの国や言語圏だが、ここで学んだ異文化理解のための〈態度〉〈知識〉〈技能〉は、他の

文化の理解、さらには様々な他者の理解にも応用することができる。医療者としての他者とは、第一に患者であり、第二に他職種であろう。また、協同学習を通して、一見均質に見える教室内も実は多様であることに気がつき、自己理解の機会を得ることにつながる。自己の理解と他者の理解は相互に影響する関係にあり、常に異文化と自文化を相対化しながら学ぶことで、学生一人一人が自他に対する理解を深めることにつながる。

一方、職場を離れた地域社会ではどうか。日本の人口に占める外国人の割合は2.2%、およそ100人に2人が外国人である⁷。人口の減少を補うため国や県は外国人の就業⁸・定住を支援しており、今後ますます日本に暮らす外国人の割合は増加すると予想されている。地域社会の国際化に伴い、異文化理解は社会を構成するすべての市民にとって重要になる。先入観を持たず相手の視点から物事を理解しようと努める態度、相手に関する情報やより良いインタラクションに関する知識、相手の考えや行動を解釈し説明する技能は、異なる文化の人々が共生するために不可欠である。そして、文化の違いによって摩擦が起きた場合は、適切なコミュニケーションによって摩擦を軽減・解消するよう努めることが求められる。ただし、いわゆるコミュニケーション能力とは単なる知識ではなく、様々な場面で繰り返し使用することによって徐々に身につくものであり、とりわけ相互理解のためには当事者意識をもって自ら行動する意志が伴わなければならない⁹。「コミュニケーション能力とは、完結的な知識の体系として教えたり学んだり出来るものとは考えられない」のであり、だからこそ授業をその「シ

⁷ 2020年の国勢調査に基づく。なお、宮城県の場合は1.1%で県民の100人に1人が外国人である。

⁸ なかでも医療は、看護師や介護職を中心に外国人労働者を積極的に雇用している職域である。

⁹ 外国語の授業におけるコミュニケーション能力の養成については、木戸(2021)を参照。

ミュレーション」の場として活用しなければならないのである（桂 1999：200f）。

このように、異文化理解は、医療系学生が将来医療者として働くために、また国際化する地域社会で多様な人々と共生するために不可欠の学びを提供する。

3. 異文化理解の授業モデル

ここまで、異文化理解の定義と医療系学生にとっての異文化理解を検討してきた。最後に、その原理を実際の授業にどのように取り入れるかを考えたい。紙幅の関係から具体的な異文化理解の授業モデルを提示するのは別の機会となるが、ここでは授業モデルの前提となるテーマ選択、授業形態、教材について整理しておこう。

まず、どのようにテーマを選ぶべきか。学習者は社会経験のない20歳前後の大学生である。したがって、学習者自身の生活経験への結節点があり、生活経験を拡大させる事柄をテーマとすることが重要である（桂 1999：205）。その一方で、異文化理解とは「発見の過程」、つまり「自己の視野や自己の世界そのものの拡張の過程」であって、「何らかの方法で学習者にとっては未知の世界にその目を開き、その世界への関心や好奇心を喚起する」ことも求められる（森田 1994：18）。要するに、学習者にとって身近な話題でありながら意外性や驚きを伴っていることが重要である。当然のことながら、学習者の側からの対象への内容的関心が必要であり、この関心は狭い意味でのドイツ語学習を超えた知識欲求の枠組みに位置づけられなければならない（桂 1999：206）。つまり、平たく言えば、授業の中で体験する小さなカルチャーショック（自分とは異なる考え方・習慣・生活様式などに接したことで引き起こされる違和感や戸惑い）を引き金として相手文化への興味を引き出し、それとともに自文化にも目を向けさせ、

知的好奇心を刺激して授業内の事例から別の事例へと自然に学びが広がるようなテーマが望ましい。

また、授業の中でペアワークやグループワークなどの協同学習を行う。教員は学習者同士の意見交換を促すことで、違和感や戸惑いを共有しつつ異なる視点を得るように働きかける。また、違和感や戸惑いがより大きな問題や摩擦につながっている場合は、それを解消する方法を話し合う場を設ける。

教材については、通常授業で使用している教科書以外に視聴覚資料などを適宜利用する。ただし、知識を与えるのではなくテーマについて解釈し学習者同士の議論を導くために、内容や提示の仕方を工夫する必要がある。

こうしたコンセプトに基づいた具体的な授業モデルについては稿を改めて検討したい。

4. まとめ

本稿では、外国語教育における異文化理解について、医療系学生の学び、および地域社会の国際化という2つのキーワードに即して考察した。

異文化理解は〈態度〉〈知識〉〈技能〉の3つの要素で構成される。それぞれを簡潔に述べると、〈態度〉とは未知のものに対して良し悪しの判断を保留しオープンな姿勢で臨むこと、〈知識〉とは相手に関する情報やより良いインタラクションに関する知識を有していること、〈技能〉とは相手の考えや行動を解釈しより深く知るためのスキルを身に付けることであり、これらは外国人のみならず様々な他者に応用可能である。これをふまえて、異文化理解を含む外国語教育の実態とその問題点を検討した。外国語教育における異文化理解の解釈は多岐にわたり、授業方法も様々である。このように多数の解釈がある中でも、異なる価値観をとおして人間的な成長を促すことに重点を置いた授業方法は、卒業後医療現場で働き国際化す

る地域社会で暮らすことになる学生にとって様々な学びを提供すると考えられる。すなわち、外国語教育は異文化理解という大きな学びの入り口を提供する場であり、学生の学習過程に沿った授業方法を取り入れることで、外国語教育が終わった後も学生の学びを支援することができるのである。その際、異文化つまり外国人の理解から他者の理解、そして自己の理解へと学びが広がるよう配慮することが重要である。最後にこれらの原理を実際の授業にどのように取り入れるか検討した。以上の考察に基づいた具体的な授業モデルについては稿を改めて検討したい。

参考文献

- ・岩田好司（2011）外国語教育と協同学習－原理と援用－、『久留米大学外国語教育研究所紀要』18、1-40頁
- ・桂修治（1999）伝達中心のドイツ語教育におけるランデスクンデの役割－外国語学習と異文化理解の統合に向けて－、徳島大学『言語文化研究』6、197-219頁
- ・木戸紗織（2021）ドイツ語学習の射程と大学教育－コミュニケーション能力・母語・社会的タスク・自律的な学習－、『東北医科薬科大学教養教育関係論集』34、1-20頁
- ・草本品（2019）外国語教育と「異文化理解」、日本独文学会ドイツ語教育部会『ドイツ語教育』23巻、75-80頁
- ・竹内愛（2012）「異文化理解能力」の定義に関する基礎研究、『共愛学園前橋国際大学論集』12、105-112頁
- ・森田一平（1994）異文化理解における外国語教育、『滋賀医科大学基礎学研究』5、15-23頁

